

チシル出ヅル、長病シテ死ナリ、定業也、

〔時還讀我書上〕一儒生語リシニ、嚮ニ京師ニ遊シトキ、一商家ノ子アリ、骨蒸ヲ病テ死セル翌日茶毗セントテ、烏邊山ニ託セシニ、中夜彼處ノ者來テ、彼屍ハ其體日ヲ經タルトミヘタリ、如何ナル子細ゾトイヘリ、主人答ルニ實ヲ以テスレドモウケガハズ、仍テ醫師及親族ナド證ニタテ、コレヲ燒シメシニ、骨悉碎テ灰トナレリ、歸途勢州ニ過テ一醫ニ此事ヲ告シニ、渠モ亦イフ、某モ嘗テ骨蒸病人ヲ茶毗シテ其骨碎屑トナリシヲ見タリトイヘリ、骨蒸ハ釀熱ノ骨ヲ焚ヲ以テカクナルコトニヤト、

腹痛

〔醫心方六〕治腹痛方第四

病源論云、腹痛者、由府藏虛、冷熱之氣容於腸胃、募原之間、結聚不散、正氣與邪氣交爭相擊、故痛、其有冷氣搏於陰經者、則腹痛而腸鳴、謂之寒中、葛氏方、治卒腹痛方書、舌上作風字、又方搗桂下篩服三方寸匕、苦參亦佳、干薑亦佳、又方食鹽一大握、多飲水送之、當吐即差、又方掘土作小坎、以水滿坎中、焚攪取汁飲之、又方令人騎其腹、溺齊中之、

〔小右記〕長和五年正月十二日丁巳、去夕主上條○三 俄重惱御坐、從大納言御許被告送也、仍召驚取案

内於資平、資平報云、非重惱御勞御腹、今朝殊事不御坐、參内、未刻先參上殿上、

〔源氏物語空蟬〕おもとは、こよひはうへにやさぶらひ給つるを、と、ひよりはらをやみて、いとわりなければ、しもに侍つるを、ひとすくな、りとてめし、かばよべまうのぼりしかど、なをえたふまじくなんとうれふ、

〔落窪物語三〕今やくと夜更くるまで板のうへに居て、冬の夜なれば身もすくむ心ちす、そのころ腹そこなひたるうへに衣いとうすし、板のひえのぼりて、腹こぼくとなれば、翁あなさかな、ひえこそ過ぎにけれといふに、しひてごばめきてひちくとなる、こはいかになるにかあらん